

沖縄の集落共同体における文庫活動

—読谷村の座喜味子供文庫の設立と活動—

嘉納 英明

要旨

本研究は、読谷村座喜味区における文庫活動に焦点をあて、その設立過程と実際の活動から閉鎖に至るまでの歩みを明らかにすることを目的としている。座喜味子供文庫は、集落共同体における婦人会や子ども会を中心とした地域文化活動であった。

キーワード／集落共同体, 子供文庫, 子ども会

Grassroots Library Activities in Okinawan Village Collectives

—The Establishment and Activities of the
Zakimi Children's Library in Yomitan Village—

Hideaki KANO

ABSTRACT

This research focuses on the grassroots library activities in the Zakimi area of Yomitan Village, and presents in detail the history of the establishment and subsequent activities of the Children's Library, up until its closure. The Zakimi Children's Library was a local cultural activity within the village collective which was centered on the women and children associations.

Key Word／village collective, children's library, women and children associations

1. 研究の目的と方法

松田武雄は、沖縄の字（集落）公民館の活動について、「行政の末端組織としての機能を担っている一方で、行政とは相対的に独立した地区独自の自治的活動や、伝統芸能に象徴されるような文化活動が活発に行われる場⁽¹⁾」であると指摘している。松田が指摘するように、沖縄の字公民館における自治的活動や文化活動は、各字の歴史や風土に培われながら様々な活動の態様を生み出し、教育文化に係わる活動も多様である。例えば、戦後初期の字公民館内で成立し近年に至るまで運営されていた保育・幼稚園教育は、集落で生まれた子どもの成長・発達を

育む環境をかたちづくりとした地域教育運動ともいえるものであり⁽²⁾、戦前からの歴史を受け継ぐ学事奨励会は、子どもの就学や上級学校への進学を促すために集落共同体の取り組みとして各地域でみられたものである⁽³⁾。こうした集落共同体における様々な教育的営為の中でも、沖縄県読谷村の字公民館における図書館・文庫活動は、区民の教育文化に対する意識を高めるために区民自らが主体となって設立した草の根の教育運動ともいえるものであり、地方の自治文化活動の具体的な姿として存在している。現在、読谷村内で図書館・文庫活動を精力的に進めている字公民館は主に3字であるが、戦後間もない頃から村内の字公民館内で図書・文庫活動を展開したのは、村内22の字のなかで10字を占める程⁽⁴⁾、村民の文化的な意識は総じて高いものであった。例えば、字楚辺は青年会図書500冊、児童用300冊を保持して村内一の蔵書数を誇り、字長浜は755冊、字波平は700冊の蔵書を有し、村内での文庫活動は一定の広がりをもって展開していたといえる。

ところで、読谷村内の中でも優れた図書館活動を進めてきたのは、字楚辺、字波平、字座喜味の図書館・文庫である。いずれの字図書館も、主に区民を対象に図書の貸出業務を展開し、区民の文化的な教養を高める地域の施設として存在してきた。字楚辺は、近年、米軍基地からの収入を基盤に体育館附設の大型公民館を建設した(2003年)。館内には図書館を拡充整備し常勤の司書を擁する等、積極的な図書館活動を進めている。字波平の図書館は、1933年(昭和8)年に区民からの蔵書の寄贈と当時の区長の尽力により「波平青年文庫」として出発したものである。同文庫は、沖縄戦により字公民館とともに灰燼に帰したが、1952年(昭27)、青年会独自の計画によって木造赤瓦葺7.5坪の図書館建設を契機に再始動した⁽⁵⁾。字座喜味の子供文庫は、区民と子どもの協同による草の根の文庫活動として知られ、しかも文庫活動を拠点に様々な文化活動を生み出し、村内外に大きな影響を与えた活動であった。

これらの事例は、地域の字公民館を拠点にシマ社会全体の取り組みとして図書館・文庫運動を組織化したわけであり、換言すれば、地域における新たな教育運動の生成をみせるものである。こうしたシマ社会において組織的な地域教育運動を生み出した原動力、加えてこれを支える要因と活動内容を明らかにすることは、衰退したと言われる地域の教育力の再生を考えるひとつの“手がかり”になるだけでなく、“成功事例”の要因を析出することで、他地域に対して地域教育力の再生の示唆を与えることにもなる。本研究では、特に、子どもと地域住民の協同による座喜味文庫の創出過程に注目したい。同地域で文庫運動を生み出した原動力とは何であったのか、また、その原動力を「子供文庫」という形に結実させた「地域の教育運動を支える力」を明らかにすることで、地域における教育の組織化の要因を析出することを目的としている。なお、本研究は、字座喜味の子供文庫設立の背景と過程を文書資料群と設立に関わった関係者の証言をもとに、文庫設立に関わる区民の活動を浮き彫りにし、子供文庫の活動の実際と文庫活動の閉鎖に至るまでの過程を明らかにしていく。

2. 地域の教育運動の原動力その1－危機意識と防止対策

1960年代以降、読谷村内では各字毎に教育隣組が結成され始めた。字座喜味においては1962年に教育隣組が結成され、字の婦人会長は教育隣組の役員を兼ねていた。当時、婦人会活動で指導者的な役割を果たしていた松田敬子は、精力的に教育隣組の結成と活動を進め、子どもの

生活・学力・出席の向上と共通語励行にも力を注いでいた。教育隣組結成の理由として松田は次のように述べている⁽⁶⁾。

部落の組織ができましたのが1962年であります。動機といたしましては、あちらこちらで青少年の不良化や学力向上の問題が取り上げられその対策が講じられつつあり、私達の部落から一人でもそのような問題になる子供をだしてはならないという意見が高まってきたからです。そのため婦人会が立ち上がって教育隣組を結成いたしました。PTA行事の年間一回や二回くらいの集会では実際に身近な問題を話し合えることはできませんでした。(略) 婦人会長さんが部落の総責任者として運営していくことになり、二十名の組長さん方はそれぞれ自分の組の責任を持って独自の活動を始めました。(傍点一筆者)

松田の証言によると、青少年の不良化問題や学力向上の問題が地域の教育課題として挙げられ、この問題児防止対策の一環として婦人会は教育隣組を結成したと述べている。続けて、松田は、学校と保護者間のお便り帳の交換、各家庭持ち回りのぜんざい会、レクリエーション大会等の親睦的な行事や子育てに関する父母の研修会等を計画・実施していくことで、地域間の意思疎通を促し、加えて子どもの教育問題は地域の問題であることに気づかせたとしている。婦人会は青少年の健全育成の一環として教育隣組に取り組むが、1979年(昭54)結成の子ども育成会以後、同会はその役割を引き受けることになる。座喜味子ども育成会会則は、「子どもたちの心身の健全な成長及び福祉の増進をはかることを目的」(第3条)とし、これの目的達成のための事業として、①子ども会活動を円滑に進めるための物的・精神的援助、②子ども会の指導者の養成と確保、③生活環境の整備の促進、④子ども理解のための広報活動の実施、⑤会員相互の研修の充実の5点を掲げた。

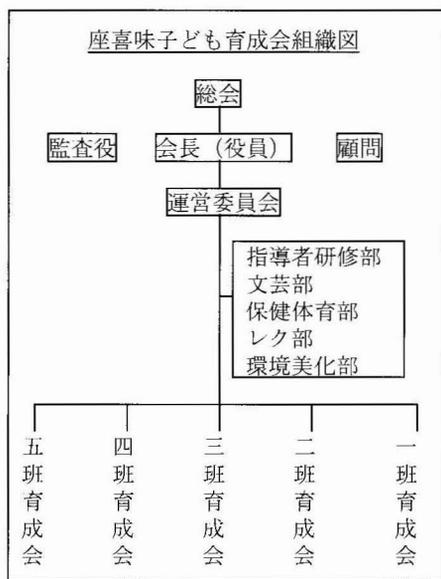
地域の教育に対する危機意識により、婦人会を中心に教育隣組及び地域子ども会の結成を促し活動を始めるが、「生活環境の整備の促進」のために文庫の設立が構想されるのである。この文庫実現のためには、地域力の集約を図り、それを文庫という“かたち”にするにはキーマン(核)の存在が不可欠であった。

3. 地域の教育運動の原動力その2 -地域の教育力の組織化とキーマンの存在-

地域住民の子ども育成会に対する期待に応えるように、子ども育成会の役員は、子供文庫という地域文庫運動を提唱し、結成の翌年には子供文庫設立に関わる資金調達の議論を積み重ねていく。子供文庫の構想の中心は、座喜味子ども育成会の環境美化部長であった喜友名昇(後、育成会会長。1985年～2000年)である(次頁図「座喜味子ども育成会組織図」参照)。喜友名は、子ども育成会の組織の継続・発展を目的として子供文庫を構想し、当時の状況について次のように述べている⁽⁷⁾。

1980年に初代の子供文庫が建設された。建設にあたっては、当時の共栄会(成人会)が計画して、育成会の父母が協力し、資金づくりはざきみ祭りを企画し、二日間さまざまなバザーを行った。また、区民の方々に寄付金を募ったところ、八十万円余のお金が寄せられた。その資金を基に、十坪程のプレハブづくりの子供文庫を建設した。内部の本棚や内装などは地元の大工の方々が協力してくれた。本は、区内の新聞社やマスコミを通じて呼びかけ、二千冊程の本が集まった。区民や子供たちの夢と希望の文庫は、子供会の活動の拠点となつて、今日の子供会活動の活性化のうで大きな役割を果たしてきた。(傍点一筆者)

宇座喜味の豊年祭の前夜祭に子供文庫設立資金造成を目的としたバザーが開催され（1980年7月）、これらの資金をもとに座喜味子供文庫が設立された。子ども育成会の記録「祝 座喜味子供文庫びらき」によると、当初中古バスの改装・整備を構想していたが予算不足から中古プレハブを活用しての文庫開設になった。業者の協力によりプレハブ建設後、内部の改装は区在住の大工によるボランティアによって整備し、区民に文庫用図書呼びかけ集めたのである。この間、子ども育成会は5つの班の育成会や教育隣組の役員と会合を重ね、文庫びらきに奔走した。子供文庫は約33平方メートルのプレハブ平屋で座喜味公民館の敷地内に建設された。各戸500円の寄付と座喜味体育協会、青年会の補助を受けての建設であった。内部設備造成基金集めバザーの開催により資金を確保して、これで材料を購入し区内の大工を始めとする奉仕作業によって完成していくのである。また、喜友名が述べているようにマスコミを通しての宣伝により、「山口児童文化研究所（東京）」を始め県外から約1,500冊の書籍が届けられ、さらにラジオ沖縄の朝の番組「おはよう日本」での「沖縄の子供たちに本を贈るキャンペーン」（1981年10月）効果により、その一部の書籍が座喜味子供文庫に届いた⁽⁸⁾。ラジオ沖縄と座喜味子供文庫の橋渡し役を果たした松田敬子は、次のように述べている⁽⁹⁾。



資料：子ども育成会「祝 座喜味子ども文庫びらき」

地域ぐるみで子供文庫を支えるのである。

このようにみえてくると、子ども育成会—喜友名は、地域住民の期待に対して、子供文庫を設立するという具体的な提案をし、そこに住民のエネルギーを組織化することに成功したものと見える。また、座喜味の婦人会は、子供文庫の設立に対して終始支援体制を組み、特にマスコミを効果的に活用した。

その頃、ラジオ沖縄で奥さまレポーターというものがあって、私は、依頼を受けて引き受けました。ずいぶん長いことレポーターをしましたね。私の担当は、読谷や嘉手納、恩納の地区で、地域の出来事、例えば、海へのゴミの投げ捨てのことや子どもの様子、お年寄りの暮らしのことなど、とにかく、地域のニュースを取り上げてラジオで話をするんです。座喜味では、子どもや親が一生懸命に文庫を作ったんだけど、もうお金もなくて、建物の中味はカラっぽ状態。そんなことを話したら、すぐにいろんな所から電話が来て、本が大量にやってきました。これを文庫に届けたりしました。婦人会も一生懸命だったね。地域の子どもの教育は、婦人会の仕事だという考えがあったもんだから、文庫の本を集めたり、子どもたちに本の読み聞かせもしたりしましたね。

松田は「地域の子どもの教育は、婦人会の仕事だという考え」に突き動かされ、子供文庫の実態を村内外に伝えた。また座喜味の区民は、子供文庫の実現のために図書を収集したり、文庫完成後は区内の子どもを対象に読み聞かせ会を開く等、

4. 地域の教育運動の原動力その3 -ざきみ子供文庫の設立と住民理解-

「初代の子供文庫は老朽化し、白蟻が発生し、またスペースも狭くなり活動に支障をきたし」、子どもたちから「もっと広い文庫、かっこいい文庫が欲しい」との声に後押しされ⁽¹⁰⁾、1986年頃から新しい文庫の建設運動は始まった。当初、新文庫は構想の中では子供文庫の名称は使われず、「児童館」であった。子ども会役員は児童館建設に対する区民の協力を呼びかける立て看板を区内に設置しアピールした。児童館建設には相当程度の資金が必要である。子ども会役員は資金調達のためには区民の協力が不可欠であることを訴えた文書を発行し、区民の理解を求めた。実際の資金づくりは、読谷まつりや区の豊年祭、親子エイサーまつりでのバザー、リサイクル用品の販売、空き缶回収等であった。児童館建設に係る積立金は、1986年度（昭61年度）から毎年度実施され、1990年度（平2年度）には合計積立金は260万円余になっていた⁽¹¹⁾。座喜味の子ども会は、建設資材購入のための資金協力を呼びかける立て看板作りをし⁽¹²⁾、座喜味公民館前で建設資金づくりのためのバザーを開催する等⁽¹³⁾、育成会の協力を得ながら自分たちの児童館の実現をめざして活動を進めた。子ども育成会は、新館建設運動を進める一方で、毎年5月の学事奨励会において「座喜味子ども文庫多読賞」として個人賞とファミリー賞を設けて表彰する等、文庫活動はそのまま継続していた⁽¹⁴⁾。

1992年（平2）3月、座喜味子ども育成会による第一回の文庫設計図の検討会が行われた。これは実質的な文庫建設準備委員会の発足会であった。検討会では文庫の必要性とこれまでの活動の経過報告が中心となり、以後、文庫建設準備委員会は翌月の会合にて「ざきみ児童館（仮称）」の建設案を作成するに至るのである。座喜味子ども育成会の「児童館建設（仮名）案1992年4月15日」は、図書館、子供銀行、ミニ美術館（2階の空間部分）、区民の学習の場をもつという区民の文化交流の場として活用されることを期待したものである。同館の運営方法は、退職教員の協力を得て平日は午後3時から6時まで開館し、土日は、子ども会と育成会の会員によるものである。子ども育成会は建設業者との打ち合わせ、資金面の検討会を続ける一方、モデルハウスや先進的な具志川市立図書館の見学等の学習を積み重ね、子どもの願う児童館建設の実現をめざして育成会役員や区民は運動を繰り広げたのである。文庫建設準備委員会は文庫建設実行委員会に発展し、子ども会資金300万円、区の補助金200万円、区内寄付金200万円、企業寄付金100万円、借入金500万円、合計1,300万円の資金での建設が決定した。但し、建物本体だけは業者側、電気・水道工事及び内装工事は区民によるボランティアの手によるものであった。座喜味子供文庫建設実行委員会と座喜味区長は、子供文庫の老朽化と白蟻被害による新文庫建設の理解と協力を得るため、次の「趣意書」を作成し、村内外と県外へ発送した⁽¹⁵⁾。

私達がこれまで13年にわたり子供達の活動の場として、また子供達の読書力向上のために大きな役割を果たして来た子供文庫も老朽化や白蟻の被害などによってその役割を果たす事が出来なくなって参りました。

最近、学校への週5日制の導入にみられる様な教育行政の変化や、学校教育の多様化、子供達の読書ばなれや学力向上対策など、地域としてこれから取り組まなければならない問題がたくさんあります。その様な問題を解決するためには、どうしても子供文庫の建設は必要なものであると考えております。

従来の建物はあまりに狭小で、図書の貸し出しにとどめておりましたが読書できる場も設定した建物を考えました。又、子供達に夢を与える様なメルヘンチックな木の香りのする、さらに21世紀の批判にたえられる様な建物を建設したいと考えておりますので、皆様の御協力をよろしくお願い致します。

座喜味子供文庫建設実行委員会
実行委員長 喜友名昇
座喜味公民館 区長 當山操

建設案中の「ざきみ児童館」の名称は、後に「ざきみ文庫」に決定した。「ざきみ文庫」の実現に向けて、子ども育成会は区内400世帯を5班に分けて寄付金徴収を始めた。主に区外在住者、村内外の企業、役場、議会、模合、学校等を訪問し、寄付金を募った。こうして区民総出による「ざきみ文庫」は、1992年11月に完成した。建物は木造1階建て、一階は99平方メートル、中二階は66平方メートルである。

5. 地域の教育運動の原動力その4 -ざきみ文庫の運営力と司書の存在-

「文庫利用の規定」及び「ざきみ文庫規約」は、1993年10月に制定された。ざきみ文庫は、座喜味子ども会と育成会を主体とするものであり（ざきみ文庫規約第9条）、その目的は、「生涯教育、社会教育を達成するために、必要な図書及びその他の資料を収集し、整理し、保管して、児童生徒、父母、区民に提供し、有効的な利用をはかること」（同規約第2条）である。ざきみ文庫は、文庫運営委員会と図書運営委員会を設置し（同規約第3条）、文庫の経費は寄付金、補助金、その他を以って充てられ（同規約第4条）、専任の司書を置き、規約、備品帳簿、会計簿、利用者貸出し簿、日誌、図書原簿の帳簿を置くことになっている（同規約第8条）。こうした文庫運営上の規約に則り、子供文庫は活動を展開していくことになる。

ところで、喜友名昇は子供文庫という箱物の資金集めに奔走したことを語り、完成後のざきみ文庫の運営については司書の資格を持つ、山城勢津子（1985年～1999年迄育成会副会長）の手腕を評価している⁽¹⁶⁾。

我々は建物を作ることに一生懸命で、実際、いろんな方々にお会いして寄付金を募ったりしていたんだが、建物が出来て、文庫が完成すると、運営方法についてはわからない。もちろん、本を買うお金も十分じゃない。山城さんはいろんなノウハウを知っているもんだから、また、研究会とか補助金のことなんかについても情報を仕入れて、運営に生かしていたね。

山城は先の「文庫利用の規定」に則り「ざきみ文庫」の貸し出しの手順を示し、文庫当番表の作成、登録カードや利用者名簿の整備、貸し出しの記録を詳細に記した。また、早くから司書の視点から「ざきみ文庫だより」を発行して、子供文庫の活動の状況を発信していたのである。一方、子ども会の役員は、「子の星 しんぶん」の中で、子ども会や公民館、読谷村の行事やお知らせを発信した。

山城は子供文庫の司書としての業務を手がける一方、外部資金の情報を収集しそれを獲得して文庫の運営に充てたり、沖縄地域児童文庫連絡協議会に関わる中で著名な童話作家を招いた読み聞かせ会や児童文庫に関する研修に積極的に参加したりして、子供文庫の質的向上に大き

く寄与した。例えば、外部資金に関していえば「ノーベル平和賞を夢見るふるさと創世基金（1993年9月）」の165冊20万円分の図書、「日本生命財団（1993年7月）」の50万円分の図書・紙芝居購入費、「伊藤忠記念財団（1993年3月）」の150万円の補助金等の獲得があり、これらは、ざきみ文庫の運営を円滑ならしめるものであった。また、1992年10月、沖縄地域児童文庫連絡協議会の役員による文庫調査と図書支給（160冊15万円分）が行われたり⁽¹⁷⁾、同協議会主催の文庫活動関係者のざきみ文庫の見学・交流を通して、他の文庫活動にも影響を与えた。ざきみ文庫を見学した文庫関係者は次のように述べている⁽¹⁸⁾。

以前から、是非一度は訪ねてみたいと思っていた「ざきみ文庫」は広い敷地内に建つ公民館と隣り合っていました。静かな集落の中に洋風でかわいらしい感じの建て物はどこからも目立ち、子ども達に「行ってみたい」という意欲をかきたてるような文庫でした。文庫の中の書架や閲覧台には工夫が凝らされ、またその月の行事に因んだ図書の紹介がなされており、その時は六月の「慰霊の日」に合わせて平和学習に関する図書が紹介されており、運営面でも色々考えられていて、私にとってとても参考になりました。「ざきみ文庫」設立までの経過について、建設実行委員長の喜友名様からお話を伺いその情熱と地域の方々の理解と協力的な態度に感動しました。

主宰者から、まず初めにこれまでの運営経過を説明してもらいました。立派な文庫が設立するまでの苦労話を説明してもらい地域の皆様の協力や奉仕作業に対する熱心な姿に感心しました。又、文庫の中の設備には、色々アイデアがあって特に本棚の形、それから子供達に興味を示してもらおうと、文庫における毎月の行事に関連する子供集会や絵本の紹介の仕方、そして絵本の種類も選定されているのには、主宰者や父兄の皆様の熱心な指導にも気がつきました。

文庫の訪問者は、文庫の中の書架や閲覧台の工夫、月行事に因んだ図書の紹介、月行事に関する子ども集会や絵本の紹介の仕方、絵本の種類の選定等、山城の司書としての運営能力を学び、また、文庫設立に至るまでの経過を喜友名からの説明を受ける中で、「地域の方々の理解と協力的な態度に感動」して帰路に就くのであった。子供文庫は、平日の月曜日から金曜日までは午後3時から6時まで、日曜日は午前9時から12時までの開館であった。図書貸し出しの他に、大学の研究者や教育者による講話、紙芝居制作・実演家による読み聞かせ会、手作り絵本教室等を開催し、見学者を積極的に受け入れた。毎月第二火曜日は、「小学生読書会」が開かれ、小学校3年生以上なら誰でも参加できる会活動もあった。司書・山城は、子供文庫の運営と活動をふりかえり、当時の状況について次のように述べている⁽¹⁹⁾。

私はプレハブで文庫をしているときから司書として関わっていました。お金もない時代だったので、その頃、ユネスコから助成を頂いたこともありました。沖縄県子どもの本研究会や沖縄地域児童文庫連絡協議会の会員だったこともあって、助成金の情報などはそこから入ってきました。「以前、どここの助成金をもらった」とか、「何とか財団から補助金をもらった」とか、そういう声や情報を手に入れては、座喜味の子供文庫として申請をしてきました。おかげさまでいろんな方々から助成金を頂き、文庫の運営をやってきました。また、中央公民館にあった図書館から50冊ほど本を借りたこともありました。

助成金の情報だけではなく、研究会に参加すると、本や童話の世界で第一線で活躍している方の情報や新しい動きもわかりましたので、是非とも、座喜味の子供文庫で講座や読み聞かせ会をして欲しいと思いました。座喜味の子どもたちだけではなく、地域の方々にも良書を紹介したり、いい意味での刺激を与えることはよいと考えたからです。こうした文庫の取り組みを月1回発行の便りで流したのです。

自分の子どもが小学生や中学生だと、育成会のメンバーとして文庫の運営に関わらないといけないと思いましたが、子どもが大きくなると文庫の運営は後の人に任せることになりました。文庫の運営は、子

ども会と育成会が中心になってすることになっていましたから。しかし、自分たちが経験したことや運営のあれこれについて、後継者になる人に十分引き継ぐことができなかつたんじゃないかと思っています。今、ふりかえってみますと、あれほど頑張った座喜味文庫の建設と運営は結局、自己満足だったのかなとも思うこともありました。もちろん、はじめは、座喜味の部落に文庫ができたので、多分、物珍しさも手伝ってたくさんの子どもの来ましたが、しばらくすると、やって来る子どもの数は少なくなってきました。退職なされた先生をボランティアで司書役をお願いしましたが、来室する子どもの数の少なさががっかりしておられたのも事実です。

山城は、ざきみ文庫運営のために外部資金を積極的に活用したこと、子供文庫を通して地域への文化発信を絶えず行ってきたことを述べているが、山城自身が培った文庫の運営方法や人的ネットワークを後継者に十分引き継ぎできなかった点を挙げている。山城の述懐と関わって、司書役として子供文庫に協力した退職教諭は「ざきみ文庫 一年のあゆみ」の冒頭で「文庫一周年に思う」と題し、以下のことを述べている⁽²⁰⁾。

私は開館当初から司書役（3時～6時）をしておりますが利用者は日に一人か二人、開店休業の状態もよくあります。文庫は図書を借りるだけでなく勉強するスペースも充分ありますので、毎日多くの人が利用してくれるものと夢を持っています。それが、開店休業の状態が続く時には、私も人間ですから、大衆への啓蒙が足りないと感じつつ、私は「招かざる人」でしょうかとつい思う時があります。意地悪な言葉になりましたが、私達の文庫は字内外の皆様のご芳志でできた大事な施設です。文庫運営委員会を中心に対策を練り、その活用を計る必要があります。

喜友名昇（子ども育成会）は、上記の退職教師の指摘を認識し、文庫の活用方法について検討を重ね、「広く区民に利用してもらおうという視点にたつて、英会話教室・空手道教室等広く区民に呼びかけているところ」であった⁽²¹⁾。しかし、隣接する座喜味公民館の老朽化が進み、国の補助事業を得て規模を拡大して新設されるのに伴い、同文庫の取り壊しが決定した。山城勢津子は、公民館の新設と文庫「移設」も検討されたが、財政的な理由により最終的に撤去されたと述べている⁽²²⁾。座喜味公民館の全面改築に伴い（2005年）、敷地内に立地していた子供文庫は新公民館内の図書文庫に吸収されることにより、子供文庫の活動は停止した。ここで、新館建設直前の子供文庫を取り巻く状況について付言すれば、①「木造の子供文庫は白蟻が発生し始め、何年持つかかわからない。しかも、区民の存続に向けての意識も低かった」という声や⁽²³⁾、②子供文庫の日曜開館を運営する子ども育成会の協力の難しさが表面化し、日曜開館が難しくなったこと、③1987年度から文庫を利用する者が減少してきたこと⁽²⁴⁾、以上の点を指摘することができる。新公民館内に所蔵された文庫の活用方法については、座喜味区の今後の課題となるものであるが、子ども会・育成会は、区内外の協力を得ながらプレハブから始まりメルヘンチックな子供文庫を設立・運営させたことは、子どもと大人と地域を結びつける機会をつくっただけではなく、子供文庫活動を営みながら子ども会・育成会を中心に様々な活動を切り拓いてきたのである⁽²⁵⁾。

6. 結語

読谷村の字座喜味というシマ社会において、子どもの教育文化環境をかたちづくりそれを育むために起こった教育運動は、中古プレハブの文庫活動から始まった。シマの小さな文庫活動は、子ども会とそれを支える育成会、区民の理解と協力をもとに設立され、まさしくシマぐるみの教育文化活動の結晶ともいえるものであった。中古プレハブ文庫は、後に木造二階建ての「ざきみ文庫」として生まれ変わることになるが、その設立過程においてシマ社会のエネルギーを文庫運動に集約し、子どもの夢実現に全力を注いだ育成会のリーダーシップは、極めて高いものであった。また、子供文庫の運営やそこにおける活動を村内外に発信したことで、さらに文庫の理解と協力を得ていくことができたのである。子供文庫の設立は、文庫活動を通して育まれた人と人とのつながりを深めていくことになり、子ども会・育成会の様々な活動を進めていく上で貴重な財産であった。

以上の座喜味子供文庫の設立過程に注目した時、座喜味というシマ社会において組織的な地域教育文庫運動を生み出した背景は、地域における青少年の不良化や学力向上に関わる住民の危機意識でとそれを教育運動へ転化させていくプロセスをみせた。住民の子育てに関わる危機意識は、教育隣組という地域の教育組織を生み出したわけであるが、この組織を活かし、後の文庫運動を展開させていくためには、複数のキーマンの存在とそれを支える区民の姿があったことである。婦人会役員の松田は、教育隣組の運動と連携して地域で様々な行事活動を通して連帯感を育む仕組み、区民の関心を地域の教育問題に向けさせた点に注目できる。こうしたシマ社会の連帯感を基盤に子ども育成会の喜友名をはじめとする役員は、子どもの読書環境を整えるために文庫の設立という具体的な提案をして、これを実現させるための運動を展開したのであった。座喜味の子供文庫構想の立ち上げから設立に至るまで、子ども育成会の役員と子ども会は、いわば、シマ社会全体を巻き込んだ運動を進めたといえる。また、子供文庫設立後、司書・山城は、業務を遂行しながら外部機関との連携・協力体制を築きながら、外部資金を獲得し、それを運営費に充てる等の卓越した文庫の経営手腕を発揮した。座喜味というシマ社会での子供文庫の設立と運営をみたとき、地域の中の連帯感をもとにしながら、文庫設立運動のキーマンが地域の人材とつながり、人と人を結びつけながら地域活動を展開したのであった。

座喜味子供文庫の設立は、シマ社会における教育運動のひとつのかたちとして我々に提案したのであるが、それが今日まで継続できなかった点について付言しておきたい。確かに、座喜味文庫の設立に関わる住民のエネルギーは大きかったのであるが、山城がいみじくも述べているように、山城による文庫の運営方法や人的ネットワークが後継者に十分引き継げなかった点はあるものの、それ以上に、文庫設立間もない頃から開店休業状態になっていた点に注目する必要がある。住民による文庫利用の激減は、住民の文庫への関心の低さをそのまま物語るわけであるが、近郊の村立中央図書館の整備充実や県下の小中学校挙げての学校図書館の読書運動の展開等により、少なからず子供文庫の運営に影響を与えたものと考えられる。

<注及び引用文献>

- (1) 小林文人・島袋正敏編『おきなわの社会教育—自治・文化・地域おこし—』エイデル研究所、2002年、36頁。
- (2) 拙稿「沖縄の字公民館幼稚園に関する一考察—沖縄島・具志川村を中心に—」（日本教育政策学会第13回研究大会における自由研究発表、立正大学、2006年7月）。
- (3) 拙稿「沖縄における学事奨励会の展開—読谷村を事例として—」（日本社会教育学会第54回研究大会における自由研究発表、東京農工大学、2007年9月）。
- (4) 読谷村役所総務課『村の歩み』1957年、60頁。
- (5) 当時の波平図書館の運営をみると、図書部長他3名の部員による運営、貸出有料制から無料制へ移行、図書購入費の確保と増冊等、利用者増を図ることで、1954年（昭29）、全琉読書週間優秀図書館として表彰されている。現在、「波平たんぼぼ文庫」と呼ばれている波平の図書館は、日曜日を除く週6日の午後3時から6時まで開館している。波平区は、読谷小学校区内にあり、波平に住所を有する児童は、「波平たんぼぼ文庫」から自由に貸し出しのサービスを受取できる。一日平均7～10名の児童が訪れ、2006年（平成18）10月18日現在の蔵書数は9,542冊である。専属の司書は、特に司書資格を有しているのではなく、児童への本の貸し出しを主な業務としている。2006年度の年間予算は7万円である。『波平の歩み』72～73頁を参照。
- (6) 読谷村座喜味婦人会編集委員会編『読谷村座喜味婦人会75周年記念誌』1990年、298～299頁。
- (7) 前掲、『おきなわの社会教育—自治・文化・地域おこし—』209頁。
- (8) 「琉球新報」1982年1月21日。なお、山口児童文化研究所は漫画百冊の寄贈に続き、天体望遠鏡を贈呈する等、座喜味子供文庫に協力した（「琉球新報」1982年1月17日）。
- (9) 2007年1月8日、松田敬子（昭2年生）宅（座喜味429番地）にて聞き取りを実施し、2007年1月13日、再度電話インタビューにて補足した。
- (10) 前掲、『おきなわの社会教育—自治・文化・地域おこし—』210頁。
- (11) 座喜味子ども育成会「1990年度定期総会資料」17頁。
- (12) 「琉球新報」1988年5月22日。
- (13) 「琉球新報」1988年12月13日。
- (14) 座喜味子供育成会「学事要覧」1986年5月10日・座喜味公民館、座喜味子ども育成会「学事要覧」1988年5月21日・座喜味公民館、参照。
- (15) 読谷村座喜味「ざきみ文庫 建設のしおり」1992年11月28日発行、所収。
- (16) 2007年1月5日、喜友名昇から聞き取り（於：座喜味公民館）。
- (17) 沖縄地域児童文庫連絡協議会編「オートブルニュース」第7号、1992年12月15日発行。
- (18) 沖縄地域児童文庫連絡協議会編「オートブルニュース」第9号、1993年10月1日発行。
- (19) 2007年1月5日、山城勢津子から聞き取り（於：座喜味公民館）。なお、2007年1月13日、再度電話インタビューを試みた。「祝 平成17年度 内閣府 善行青少年及び青少年健全育成成功労者 善行青少年の部（団体）受賞記念誌」平成18年（2006年）2月12日、5頁、参照。
- (20) 司書・山城勢津子編「ざきみ文庫 一年のあゆみ」中の「文庫 周年に思う 比嘉房雄」より。
- (21) 前掲、『おきなわの社会教育—自治・文化・地域おこし—』210頁。
- (22) 「沖縄タイムス」2004年6月10日。
- (23) 2007年1月5日、喜友名昇から聞き取り（於：座喜味公民館）。

- (24) 新館・ざきみ文庫の開館（1992年11月）前の座喜味子ども文庫利用者別統計表（1985年～1992年）によると、1986年度の1,969冊をピークに翌年から下降し、1990年度は461冊、1991年度は324冊と激減している（座喜味子ども育成会『1991年度 定期総会』資料）。
- (25) 座喜味子ども会・育成会は、座喜味の伝統芸能である棒術の継承や屋久島体験学習、募金運動、米軍基地建設反対署名運動等、様々な活動を繰り広げた。